

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(十四)

津 守 真

夏休みを終わって、久しぶりに幼稚園で会う子どもたちを見ると、一段と成長したと思うことが多い。ずっと幼稚園に来つづけていたら、こんな成長を見せたのだろうかと思うこともある。夏休みを終えて集まってきた子どもたちの、落着きと自信と意欲にふれるとき、休みの間にこの子たちの生活に何が起っていたのだろうかと思う。

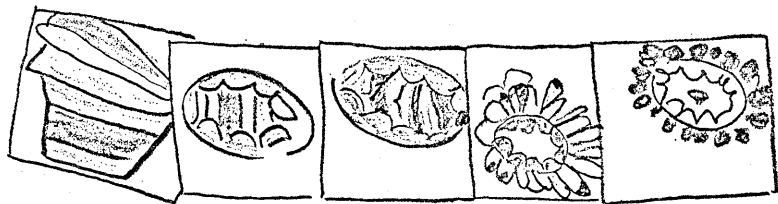
夏休みの意味

このことを私に考えさせてくれたAの事例について、はじめに述べたい。

Aは、四歳から幼稚園にいきはじめて子どもであるが、最初か

ら元気に幼稚園にゆき、よく遊び、時には友だちと張り切って遊んでおり、この子どもなりに幼稚園をたのしんでいた。それでも最初の集団生活で、緊張していたのだからと思う。夏休みになると、二、三日は、ぐでぐでと、本気に遊ぶこともなく過していた。そして、ある日画いたのが写真1の絵である。ひきつづいて、約二週間の間に、この子どもは同様のテーマの画を約四十枚かく。

写真1は、五枚の画から成る。Aはこれを描いて後、自分でのりで貼った。シリーズを全体としてみると、中心をもった渦巻の回転がつけられる過程を見ることができよう。第一枚目は、中心のない、部分層の積み重ねである。濃淡の異なるはだ色と青と赤より成る。二枚目、三枚目となるにつれて、次第に内部が分化し、



▲写真 1

4歳10か月女児

四枚目で外方向う青色の足が出て、五枚目で赤い丸の中心と、外側をとりまいて回転する緑色の丸が描かれ、全体が中心によって統合されたものとなる。

このような描画は、描き手の心の内的精神の状態をあらわすものであると私は見る。その詳細は、ここでは説明を省略するが、この子どもは、過去においても、もつれた糸玉のような混沌とした心の状態から、中心をもった渦巻の統合が生れるまでの過程を体験し、これを一連の描画で表現することをしている。今回はそのような過程の認識の第二の周期である。

幼稚園の最初の学期の生活は、子どもにとって楽しいものであったにしても、のりこえなければならぬことや戸惑いも多くあり、緊張の中

に、整理もつかないままに過ぎてきたことであろう。そして、夏休みに入って、社会生活から解放され、自分のペースの生活を回復するにあたって、このような画を描いたことは、大へん面白いことであると思う。

子どもは、混沌から中心をもった統合に至る過程を——それはかつて長い月日をかけて体験したものであったが——ここで一瞬の間に再現した。それは、夏までの生活を自分自身でもう一度考え直し、位置づけ、新たな方向へと向け直す子どもなりの作業ではなかったらうか。

子どもは言語や文字を順序よく書きつらねて自分自身を表現することをしない。むしろ、そのときに駆使し得る方法、画を描くことによって、自分のとらえたところを表現する。子どもがそれをどれだけ意識的に行っているかは疑問である。しかし、過去・現在・未来を子どもなりのやり方でとらえながら生きていて、それを何かの方法で表現するということはできよう。

Aは自分でこの五枚の画を貼りつなげて、終ったらさっと立去って、遊びはじめた。私はこの画を見るたびに、何か不思議な感に打たれる。

Aはこの後、約二週間にわたって、中心をもった渦巻のテーマの画を約四十枚描く。それは、ひとたび自分が発見した、いわば

自分自身の「哲学」を、自分で何度もたしかめているかのようである。ここでは、その中から二枚だけ、例を示しておくにとどめる。(写真2、写真3)この時期からずっと後に、Aには、同じテーマの描画表現の第三周期、第四周期があるのであるが、それについては後にふれる機会があるかもしれない。

このAの例にみるように、夏休みという、学校・社会生活から解放されたとき、子どもは過去を考え直し、反省し、とらえ直して、自分らしさをとりもどすのであると思う。夏休みが終ると、子どもは一步前進し、成長したようにみえるというのは、単に海や山に行ってふだんとは違った経験をしたというだけではなく、子どもなりに自分自身をとりもどす精神作業をしていたからでは



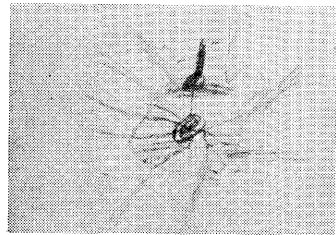
▲写真 2

「くじゃく」—中心をもった渦巻の一例

ないだろうか。そのやりかたや内容は、もちろん、子どもによってまちまちであって、Aの例は、ただひとつの例にすぎない。

夏休みが終って、久しぶりに出てきた子どもたちは、いつものように無言で私にとびついてくる。あるいは、親しげに近寄ってきて話しかける。そして、めいめいに遊びはじめます。私は同じようにふれながら、何か一步成長したように感じる。いったい、久しく来ない間に、この子たちの中に何が起ったのだろうかと思議に思いつつ、立止って見る。

夏休みと、幼稚園・学校のあるふだんの時とを対比してみると、それはいろいろの点で異質な時空間である。一方は、毎日一定の時間に出かけていかねばならず、いろいろの子どもやおとな



▲写真 3

中心をもった渦巻の一例

に出会う緊張があり、それがどんなに自由に遊べる場所であつたとしても、相当の社会的要請を避けることはできない。

まして、多くの子どもたちにとって、毎日、幼稚園や学校にゆくことは、肉体的にも精神的にも相当の精神的負担であるはずである。幼児期を過ぎたずっと後年になって、Yは、「学校って、考えるひまがないんだよ」という。

それに対して、休みの期間は、子どもは自分で考えることができる。自分で思うように時間を使うことができる。休みにはいるときに、子どもは、幼稚園・学校の社会生活とは別の世界に生きるのである。

このような異質の世界の交代は、人間の生活にかならずある。もっと短い周期でいえば、一日の中でも、社会生活に過す部分と、家庭で過す自分の生活とある。そして、もっと生活の根底には、覚醒の時間と睡眠の時間との交代がある。

眠る時に、人は覚醒時とは別の世界にはいり、夢の中での精神生活があり、目覚めるときには、前日とは違った気持で新たな朝を迎える。ひと晩眠ったから、前の日に逆もどりしてしまつたというようなことはだれもいわないであろう。むしろ、ひと晩よく眠って、いい考えが浮んだとか、また新しくやる気になつたとかいう。覚醒時とは別の世界での生活を過すことが、いわば前日の

できごとの整理をしてくれて、新たな方向を見出させてくれる力を生み出しているともいえる。

夏休みのようなまとまった休みの期間は、睡眠の時にも比せられると思う。その間に人は何もしていないのではない。ふだんとは別のことをし、ふだんの生活の中で負っていることを考え直し自分らしい生活をし、そして、休みが終つたときに、前とは違つた人間となつて幼稚園や学校に出てくるのである。

夏休みには、こうした異質な世界の交代という意味がある。これは夏休みとは限らない。一年の中に何回かある長期の休みの期間は、成長期の長年月を学校で過すようになった現代の子どもたちにとって、重要な意味をもつものである。ことに、幼児期に、幼稚園という社会生活が分化するようになったのは、ごく最近のことである点も、なお考慮すべきことである。異質な別の世界は、何れかが、何れかのためにあるというものではない。両者があつて、ひとつの人間の生活となるのである。

私がここに記してきた附属幼稚園の子どもたちは、幼稚園の中でも、ずいぶん分らしく振舞い、遊ぶことができている子どもたちであると思う。それでもなお、はじめて入園した子どもにとつては、緊張した社会生活のようである。四歳児の母親は、夏休み

の間の感想として、次のように記している。

U「今年四月に入園して三か月、新しい環境にとまどいながら、毎日少しずつなれていったようでした。でも、お友だちと意志の疎通を欠いたり、自分自身を思うように出せなかったりで、そんなものがストレスとしてたまったのでしょうか、何となく体の調子を狂わせてしまった一学期でした。そして迎えた夏休みは、Uにとって大変貴重なものだったと思います。夏休みになってすぐ発熱しましたが、後半は、幼稚園生活をはなれて、近所のお友だちと思う存分あそびました」

幼稚園の生活だけ見ていると、楽しそうに適應しているようにみえても、どんな子どもも、はじめての社会生活による緊張があるのだということがわかる。

夏休みは、しばしば、母親たちには、たえず子どもにつきまといられると言つて嫌われる。しかしまた、多くの母親たちが、本能的に、夏休みを、子どもたちと普段とは違った落ち着いたつき合いをすることのできる時としてとらえていることも事実である。

四歳児のある母親は次のように述べているが、この母親の見方

に感心させられると共に、これはかならずしも特殊例ではなく、多くの母親が経験しているところであろうと思う。

I「二か月の夏休みは、日頃時間に追われる生活から解放され、一日一日を充実した時間として見直させてくれる絶好の機会だと思いました。今年の我家の夏休みは、父親の仕事の都合と天候とのバランスがとれず、海へ山へという華やかなことはありませんでしたが、十分に子どもとの会話と、肌の触れ合いができたことは、大きな収穫だったと思います。お友だちと一緒に紙芝居を作り、お兄ちゃまの工作におつき合いして、絵の具で思いっきり絵をかかせたり、日頃はのんびりときあえない私も、本当にのんびり接することのできた有意義な日々でした。こんなあたりまえな夏休みがあってもいいと思いました」

夏休みに、別の社会生活のプログラムに追いかけられたら、子どもはまた自分の生活をもてなくなってしまう。母親との間のゆっくりとしたつき合いの中で、幼児は自分自身の生活を最もよく持つことができるのが普通であろう。母親にとっても、夏休みは子どもと十分につき合つて、共に考えることのできる機会である。

二期期の子どもたち

X月二〇日

朝から昼近くまで、男児Kと男児Tは二人で砂場で遊んでいる。容器に砂をいれてアイスクリームと言ったり、砂山をつんで穴をあけたり、互いの足を砂で埋めたり、その他、記述するのが困難なような単純なことをして、二人で落ち着いて遊んでいる。

Kがこうしてだれかと一緒に遊ぶのを見るのは、私には珍らしい。二人で一緒に、めいめいがそれぞれの砂遊びをしていて、ときどき一緒にになり、しかも二人は相呼応して遊んでいる。明らかに、KとTは、二人で「一緒に」遊んでいることを楽しんでいゝ。私は傍にいて、砂場に入ってゆくことははばかられた。

私が見てきた範囲では、Kは子どもと一緒にの場面では、じきに相手の嫌がることをしたりして、素直に他人と共に活動を継続させることが困難なことが多かった。たとえば、三歳の時の五月の記録では（本誌七十六巻二号、五十五頁参照）、Kはおうちごっこに入りたくてそのそばにいるが、皿やコップを渡されても、「なんだ、こんなの」と言つて放り投げたりすることが多く、おうち

ごっこをやりとりの中に入りこむことができない。

他の人と互いに応答しながらつきあうことができないということは、これを個人に即した内的観点から見るとすれば、他人と応答する自分自身を受け容れることができないことである。

おとなの場合には、グループの対立や主義信条の対立、あるいは、自分を優位に保つことや、すべてを自分の思い通りに完全にしようとする観念等々が基礎にあつて、そのために、他人との対等円滑な交流を楽しむことができないというようなことになる。そこには、他人との応答を受けいれることのできない心的過程があり、それは普通には意識されにくい。

幼児の場合には、おとなの心を分断する要因とは内容を異にするけれども、他人と応答して遊ぶことができないというのは、そうすることを受けいれることができないでいる自分自身があるからであろう。たとえば、これをKのおうちごっこの事例に即していうならば、差出されたものを受けとる自分自身を、Kは受けいれることができない。それはKの意地や自尊心が許さない——これは推察であるけれども——。

子どもが何かをおとなに差出したとき、おとなが、「なんだ、こんなの」という風に、素直に受けとってくれなかったら、子どももまた、相手の差出したものを素直に受けとらないというダイ

ナミックスが働くだろう。差出したもののみでなく、子どもがしたことを、おとなの規準に合わない故に、おとなが受けいれることができないときには、全存在が否定されることになる。そのようなときには、子どももまた、他人の存在自体を否定するようになるかもしれない。

これはしばしば、知恵おくれの子どもなどに一層起りやすいことである。知恵おくれの子どもは、その子なりに精一杯にしたことでも、おとなから快く受けいられない可能性が多い。同じ程度に知恵がおくれている子どもの場合でも、そのすることを、親が快く見てやれる場合には、子どもは他人の存在を快く受けいれ、他人とつき合うことが容易になるだろう。

素直に受けとることができるようになるのは、してほしいことをやってくれる誰かを得られることであるということを、E・エリックソンは、英語の語彙の用法から、乳児と母親との関係に言及して論じている。

「得る (to get) とは、受取ることであり、与えられるものを受約することである。これは人が人生で学ぶ最初の社会的状態である。それは単純なことのように思えるが、実際はそれほど単純なことではない。……母親がまず与える方法を発達させ、それを調整する。それに従って乳児が彼の受取る方法を発達させ、協応

させる。……乳児と母親の双方は、口と乳首という焦点的な器官を通してだけでなく、身体全体で、温情と相互性をくつろいで示し合い、楽しむ」(E・エリックソン、仁科弥生訳、幼児期と社会、みすず書房 昭52 P 89~90)

さらに、エリックソンは、受けること―得ることについて、get の用法をめぐって次のようにいう。

「このようにして発達した相互にくつろぎあう関係こそは、友好的な他者との初めての出会いにとって、もっとも重要なものである。このように与えられるものを得て、自分がして欲しいと願うことを自分のために誰かにしてもらうことを学ぶうちに、乳児もまた与える人になるために必要な自我の基礎を発達させるということができる」(E・エリックソン 前掲書 P 90)

ここで翻訳されていることを、英語の get に即して見ると、もっと明瞭になる。第一に、同じ get が、受けるという意味をもつと共に、第二にそれは得るという意味にもなり、第三にそれは与え手となるという意味にもなる。

1. to get what is given (与えられたものを受けること)
 2. to get somebody to do for him (してくれる人を得ること)
 3. to get to be a giver (与え手となること)
- 与え手となることができるのは、与えられる経験と密接な関係

があることを、これらのことは示している。

さて、Kは以前には、友だちから差出されたものを、素直に受けとることができなかったのであるが、四歳の夏休みをこえた時に、他の子どもと相呼応して遊ぶこと——相手から受け、相手に与える相互性を楽しむようになった。それは、K自身が、おとなから受けいられ、関心や愛情を得ることから生れてきたものといえよう。さらにその基礎には、十分に遊ぶことによつて、自分のすることを自分で受けいられるようになったことによるものといえよう。

夏休みの感想として、Kの母親は次のように書いている。「Kが何か新しいことに直面した時、目を輝やかし、胸をふくらませ真剣に向つてゆく姿をたのしく思いました。幼稚園での一年半の生活が、Kを通じて理解できるような気がし、先生の地道な努力に感謝を新たにいたしました」Kの母親は、Kのすることに意味を見出すようになってきている。Kに向う母親の眼は肯定的で温いものになっていることが文面から感じとられる。

そして幼稚園の先生に対する感謝を記しているのは、Kの母親のみであることを考えるとき、もちろん、幼稚園の先生の力も大

きいが、このことを感謝できるようになった母親の力も大きいと思う。この母と子の夏休みの様子が想像できるような気がする。

二期期になって、急に成長したように思われるのは、Kにとどまらない。多くの子どもについて、成長を感じさせられる。愛育の知恵おくれの子どもについても同様である。それぞれの子どもが、自分の負っていた問題から脱皮して、面白くて張りのある生活を求めつつあるように思われる。新宿御苑に遠足にいったとき、何人もの子どもが、同じ場所に遠足にきていた普通の幼稚園の子どもたちの輪の中にはいらたがる。以前には見られなかった光景である。

(つづく)

